

# 百合若説話と八幡信仰

前田 淑

## はじめに

舞の本「百合若大臣」の成立以前に百合若説話があつたか否かということは早くから問題にされている。さきに拙稿「幸若舞曲『百合若大臣』と報恩経<sup>註1</sup>」の中で仏典との関係をのべた折、仏典から舞の本までの間に、今は失われた何物かがあつたのではないかという質問が二、三の方からよせられた。もちろん、舞の本の「百合若」が直接仏典を素材として生れたものではないであろうということ、わたくしにも想像できるのであるが、かぎられた資料ではそうしたことを予想することはできても、実証することはなほだ困難なことといわざるを得ない。本稿で百合若説話にみられる八幡信仰、とくに宇佐との関係を考えてみようとするのも、こうしたかぎられた資料の中から、舞の本成立までの何らかの手がかりを得たいというねがいにほかならない。

百合若説話が宇佐と何か関係があるのではないかという点については、前掲の拙稿でもすこし触れたのであるが、豊後、筑前、豊岐などを本貫地とする百合若説話は、ひとり宇佐のみでなく、北九州

という風土をぬきにしては考えられない。かつて金関丈夫博士は、海神住吉を奉ずる古代日本の海上部族を、こうした海の文学の伝承者として考えることが可能であるとのべられたが、宇佐を中心とする八幡信仰もまた北九州古代の海人部族の伝承と密接な関係があり、百合若説話の基盤や背景もこうした角度から考察することができると思うのである。以下、資料に即して検討することにしよう。

## 一 百合若の誕生と名称

説話の順序にしたがい、まず主人公の出生について考えてみる。周知のように、舞の本では百合若は初瀬観音の申し子とされ、その名も「夏のなかばのわかなればはなにもよそへてそだてよとてゆりわかどのと名付申」(新群書類従本)と語られている。ところが、つい最近まで長崎県豊岐島でイチジョーという梓巫によつて語られていた悪霊退散のための「百合若説経<sup>註3</sup>」は、このくだりについて舞の本とは異なる興味ある内容をもっている。

朝日の長者との宝比べに、子宝なき故にやぶれた万の長者は、一人の子宝を念じて清水の観音に参籠するが、夫婦の前世の悪業のむ

くによつて、子種はないと言ひ渡される。しかし夫婦の真心が通じたのか、二月下旬というのに、池のほとりに一本の百合の花がひらいた。長者の妻は、この花を観音の御前に供える。するとその翌日、

二七日に相当る十四日晝方に観世音は御身をば八十余りの老僧と現じ給ひて(中略)右の御手に盛りと開きし百合の花を一本持せ給ひては(中略)汝<sup>(ママ)</sup>に夫婦に授る子種なしとは見たれども夕べ暮方に入幡宮の利生を添させ給へば入幡の利生を以子種さづけ得さする也(傍点筆者以下同じ)

と託宣があり、月みちて生れた男子は、

百合の花と申せば入幡宮のひぞふの花にて候へば入幡宮を方どり百合の花をかたどり則此君の御名をば百合若の大臣殿と参らすることになつてゐる。

百合若の父を万の長者とすることは、あるいは豊後の真野の長者と関係があるのではないかと思うが、それはともかく、百合若の誕生に入幡の利生が添い、入幡ひぞふ(秘蔵)の百合の花にちなんで百合若と名づけられたということは、みのがせない一事である。長者の妻が手折つて観世音に捧げた百合はまさしく入幡のシンボルである。しかしこうした思想がどこからきたのか、いまのところ寡聞にして知ることができない。

従来、百合若の名称については、ユリシーズのユリによるものといひ、また「ユリ」と呼ぶ呪具にちなんだものともいわれてきた。<sup>註5</sup>前者は、最近ではあまりとりあげられなくなつたが、後者は民俗学者の間で相当重要視されている。彦岐の「百合若説経」も、「ユリ」

とよばれる器に木弓をのせ、これをたたいて悪霊退散を祈る弓祈禱の詞章であり、この呪具のユリや弓が、あるいは百合若説話の主人公の名や、強弓と関係があるのかもしれない。ただ現存する「百合若説経」の詞章は、いろいろな点から江戸時代になつてからのものではないかと思われるし、弓祈禱そのものの研究とも関連があるので、いきなり呪具と説経の内容とを結びつけて考えることは、いまの段階ではさけたいと思う。

舞の本の「百合若」の成立はどんなにくだつても室町末期までであり、<sup>註6</sup>その中で百合若を初瀬観音の申し子としているにもかかわらず、江戸時代の成立と思われる彦岐の「百合若説経」が入幡の利生と百合の花を語つているのには、それ相応の意味があるにちがいない。あるいはユリの語に結びつけて、こうした話を作つたのかもしれないが、それにしても何故入幡宮をもつてきたのが疑問である。百合と入幡との関係がわかれば、あるいは氷解するかもしれない。後述のいろいろな点からみれば、入幡の神助によつて誕生したと語る方が、むしろ古い形ではなかつたかと思われるのである。

## 二 むくり退治

舞の本のむくり退治のくだりが、元寇をもととして書かれているのは周知のことである。ことに鉄炮によつて日本軍がなやまされたことは、「入幡愚童訓」や「太平記」などに記されている通りで、舞の本もこうした先行文芸や文献などによつたものであろうといふことは、想像にかたくない。舞の本のむくり退治は、<sup>註7</sup>応永の外寇と関係があるのではないかと、かねてからひそかに考えているが、室

町時代には異国の襲来といえ、必ず元寇のイメージが重なっている。たとえば土佐光信筆の「神功皇后御縁起」をみても、皇后の軍が新羅軍と海戦するくだりの絵は、蒙古襲来のそれとはなはだ類似している。元寇に入幡宮の神助があつたことはいまさらいうまでもないが、鎌倉中期の成立といわれる「入幡宇佐宮御託宣集」の異国降伏事の条には、神代以来、異国の来襲に対して入幡の神助が如何に多かつたかが縷々と記されている。

舞の本のむくり退治のくだりには、ことさら入幡宮については述べていないが、異国降伏についての入幡信仰はおのずからあらわれている、とみるべきであろう。また託宣集の異国降伏事の条には、

「大唐新羅国ノ軍ヲ滅凶<sup>註9</sup>カセム為ニ天衆地祇海神水神山神等ヲ召集テ忽ニ海中ニ嶋ヲ造給フ云々」というように、入幡宮の神意によつて島が造られることが述べてある。しかもこの島は、「海中ニ嶋作ル故ハ神祇ノ威勢<sup>註10</sup>無道之衆生ヲ導キ自他国リ発来ヘハ賊ヲ反鎮カニシ」という託宣のように異国降伏に対して大きな意味をもつていた。舞の本「百合若」において百合若がおき去りにされる「げんかいが島」は、絶海の孤島と解釈されるが、もとは、こうした託宣集にみえる島と心理的に何かのつながりがあつたのではないだろうか。

### 三 海洋流浪譚

さきに報恩経の善友太子の物語と舞の本「百合若」を比較した際、海洋流浪の部分がおどろくほど類似していることに気づいた。

しかしながら、仏典と舞の本との間には距離がありすぎて、直接取材したと考えることはなおためらわれるのである。では百合若説話

の原型になるような海洋流浪譚が、はたして北九州にあつたのであろうか。この問題に関する金関博士の説は、はなはだ示唆に富んでいる。

博士は、神武紀における神武天皇伝や応神紀における武内宿禰の物語を、古代日本における百合若説話の存在を探究する手がかりとされている。<sup>註11</sup>即ち前者は、宇佐より多年の歳月を費して海上を流浪し、南海より大和へ入る英雄流浪譚で、印度などにも類似の話があり、古事記の綏靖天皇の条にみえる神武の子らの物語はユリシーズにおけるテレマコスの話と揆を一にするものである。また、後者は、筑紫に使いし、弟に裏切られて死罪を得、忠臣の身代り——宇佐における百合若の妻にも忠臣の身代りの話がある——によつてひそかに生き、南海を流浪して都に入り、思わざる死者の生還の形をとつて裏切者の前にあらわれるという、これも百合若説話と同じ系列の英雄流浪譚であると述べておられる。武内大臣の話は、今は忘れられているが、江戸時代にはポピュラーな物語として読み物にもなつており、一方では単に「大臣」の話として民間に伝承されていたものではなからうか。もしそうならば、「百合若大臣」の「大臣」と、すこぶる関係が深くなつてくるのである。また武内大臣の話のうち、海中如意宝珠を求めるといふ物語——善友太子の話にもみえる——のようなお伽ばなし的要素は、神功皇后に関する物語の方に移つてしまつたと博士はいわれる。<sup>註12</sup>

こうした日本の類話は、おおむね宇佐をめぐる展開している。さきにふれた「入幡宇佐宮御託宣集」は宇佐を中心として九州の有力な神々の伝説を綜合したもので、当時宇佐をとりまいていた種々

の示唆に富む地方的伝説の宝庫である。したがってその中には、濃厚に海人部系の説話も織りこまれており、住吉、志賀海神、彦火々出見尊といった海人部系の代表的神々がそれぞれの役割をもつて活躍している。したがって、宇佐をめぐる英雄海洋流浪の物語も、おそらくはこうした海人部たちによつて伝承されたものと思われる。多年の不在の後に故郷へ帰るとき、最愛の妻さえも認め得ぬほどの姿となつていのではないかという、海上生活者のたえざる不安が、こうした物語の熱心に伝承された共通の心理的モチーフの一つではなかつたか。海幸山幸の神話にみられる満珠干珠の話や、古事記のイスケヨリヒメと大久米命の唱和なども、英雄流浪譚の一部とみた場合、別の意味をもつた物語となるのであるが、ここでは省略しておく。

#### 四 鷹の文使い

百合若説話で重要な要素の一つは愛鳥の文使いである。かつて坪内博士は、ユリシイズの中で、女神ミネルヴァが海鷲となつて飛ぶところから、鷹の文使いを考えついたものであらうと述べられた。<sup>註13</sup> たしかに緑丸という鷹の名もミネルヴァに似ている。しかしながら、報恩経の善友太子の話の中にも雁の文使いがあり、しかもこの雁を日本ではすでに鎌倉時代に鷹の文使いと考えていたことが、源平盛衰記の記事であきらかとなつた。<sup>註14</sup> しかし何故鷹と考えたかは不明である。仏典の文字の誤読、日本における放鷹の風習なども、その理由の一つになりそうである。ちなみに仏典では、善友太子の話をのせる報恩経、賢愚経などいずれも梵本がなく、原説話の鳥名が

何であつたか判明しない。しかし英訳「ジャータカ」にはアオサギの文使いの話がみえるので、<sup>註15</sup> 漢訳で「白鷹」と訳した鳥は、あるいは白サギの一種であつたのかもしれない。

鳥の文使いは洋の東西を問わず、枚挙にいとまがないが、鷹の文使いは、印度、中国、日本を通じて、きわめてまれである。わずかに中国の『朝野僉載』<sup>〇</sup>にみえる「太宗養二白鶻一、号二白將軍一、取レ鳥常驅至二於殿前一、然後擊殺、故名二落鷹殿一、上恒令レ送レ書、從レ京至二東都一、与二魏王一、仍取レ報、日往反數廻、亦陸機黃耳之徒歟。」<sup>註16</sup> という記載が、わが国の百合若説話のそれとともに、世に知られているにすぎない。

ところで、鷹が八幡宮と密接な関係を有することは、従来ほとんど問題にされなかつた。『八幡宇佐宮御託宣集』<sup>(菱形池)</sup>に、

金刺宮御宇二十九年戊子、筑紫豊前国宇佐郡菱形池辺小倉山之麓、有二鍛冶之翁一、帶二奇異之瑞一、為二一身一、現二八頭一、人聞レ之為二実見二行時、五人行即三人死、十人行即五人死、故成二恐怖一無二行人一、於レ是大神比義行見レ之更無レ人、但金色之鷹在二林上二、致二丹祈之誠一、問二根本二云、誰之成レ変乎君之所レ為歟、忽化二金色鳩一、飛来居二袂上一、爰知二神变可レ利レ人、……

とあるが、この金色の鷹、および鳩はいうまでもなく、八幡神の化身であつた。このように八幡神が鷹となつて現することは、宇佐関係の多くの文献にみえ、また「八幡靈鳥鷹也」<sup>(義鷹)</sup>、「夫鷹者……春化為鳩仁也」<sup>(新修鷹)</sup>などもあつて、古来八幡ゆかりの鳥として鳩と同じ性格をもつていたのである。百合若説話の鷹も八幡信仰

の角度からみれば、宇佐のゆかりの鳥と考えることができる。ちなみに、越後地方で語られている百合若説話では、鳩の文使いの話として伝えているが、これを単なる伝書鳩と考えるのは、あまりに近代的な解釈であろう。

鷹は古来、神の化身として考えられた。ヨーロッパでは太陽神の象徴としてあつかわれ、わが国では八幡神の外に熊野三所の化身としても考えられてきた。<sup>註18</sup>熊野もまた説経文学ときりはなせない土地なので、百合若説話の鷹についても早急な解釈はさけなければならぬが、本稿では八幡宮ゆかりの鳥ということの問題としてとりあげたのである。

## 五 身代り説話

愛鷹の文使いによつて夫の生存をたしかめた妻が、その無事帰還を宇佐の宮に祈つて願書を捧げるくだりにも八幡との関係がうかがわれる。つづいて醜怪な姿となつて帰郷した百合若は、妻の危難を救つた門脇翁の娘の身代り話を立ち聞きする。この身代り説話は、愛鷹の説経をはじめ、多くの百合若説話には、みられないところであるが、さきに述べたように、金関博士は、英雄海洋流浪譚の中には身代りによつて命をならえ、思わざる死者の生還の形をとるものがあり、舞の本の場合は、主人公ではないが、やはり同一の型の変形とみてよいと言われる。しかし、この点に関しては、まだ考える余地がありそうに思われる。一般には、室町時代の文学に見られる身代り説話と揆を一にするものだと考えられているが、ただ単に物語を複雑にするために挿入したものか、あるいは英雄海洋流浪譚に

おける一要素の変形か、にわかには断定することはできないと思う。

舞の本にみえる身代り説話は、豊後(大分市)の名刹蔭山万寿寺の縁起と関係が深い。この寺は寺伝によれば、徳治元年(一三〇六)大友家五世貞親の時再興したもので、百合若の妻の身代りになつた万寿姫の菩提をとむらうために百合若がたてたという縁起<sup>註19</sup>がある。また近くの石垣村には万寿姫の墓や百合若の塚があるといわれ、この地方が、百合若説話発祥の地の一つであることは疑えない。この万寿寺縁起がはたしていつごろ成立したか明らかではないが、万寿という名が示すように、この物語も巫女と関係があるので、万寿寺という名が示すように、舞の本の成立よりはるか以前から蔭山万寿寺と称していたことは明らかで、こうした身代り説話も万寿という名にちなんで早くから伝えられていたのではなからうか。あるいは百合若説話の伝承者であつた巫女との関係を示す痕跡かもしれない。

万寿寺と宇佐八幡との関係は不明である。筆者のみた託宣集の末尾には、万寿寺比丘某の名がみえる奥書があるが、それ以上のことはいまのところ明らかではない。しかし、この万寿寺の縁起は、豊後地方の伝承の一つとして、とくに触れておきたいのである。

## 六 強弓と英雄

かつて百合若の愛用した鉄の弓は、宇佐の宮に納められた。その弓を引く者は日本広しといえども百合若の外にはない。人か怪物かわからぬほど醜悪な姿の菩提丸が、この鉄の弓をひきしほつた時、並にいる人々はおのれの眼で百合若の生還を確認せざるを得なかつた

——舞の本「百合若」の中でもつとも痛快な場面であり、ユリシイズの十二の環を射る物語の雛案だとして、はやくから人々の注目をあつめたくだりである。

百合若と強弓とは、きつてもきりはなせぬ関係があり、各地に残る百合若説話の断片にも、こうした強弓の話が伝わっている。しかしこのような弓の話は、はやくから北九州地方にあつたのではないだろうか。その一例は舞の本「烏帽子折」にみえる山路の物語である。宇佐八幡の神事流鏑馬の折、みごとの射通して玉世姫を得る話は、宇佐にからまる弓の物語の一つとして注意すべきであろう。つぎにあげたいのは鎮西八郎為朝と強弓の物語である。為朝がすぐれた弓の名手であつたことは歴史的事実であろうが、沖をゆく軍船を一矢で沈めた話や土地の者たちが何十人かかつても彼の強弓をひきしほることができなかつたという話は、まつたくの伝説である。しかし、こうした伝説が為朝と結びつくためには、それ以前から、類似の伝承が九州地方にあつたものとみななければならぬ。ことに源氏と八幡宮との関係を思えば、これまた宇佐あたりをめぐる物語の一つではなかつたかと思うのである。

もう一つの例は、さきにふれた土佐光信筆「神功皇后御縁起」にみえる弓の物語である。この御縁起には、海人部の伝承を神功皇后と結びつけた注意すべき説話が多いが、その中に、つぎのような物語がみえている。

又葦屋の津と云所につかせ給ふ時に此老翁弓箭を取出て物を射  
待りけるを御覧すれば行へもなき大なる岩の崎十丈はかり指出  
たるをよく引ていたりければ物にもあらずくと射とおしたりけ

り皇后をはしめ奉て供奉の官軍等奇特の思をなす実に人力のおよふへき所にあらず

これはウガヤフキアヘズノ尊の化身である老翁に関する弓の物語で八幡縁起乃至は神功皇后縁起と称するものにはほとんど収録されている説話である。これもまた八幡に関係があり、こうした弓の物語は百合若以前から、海人部系の伝承の中に存在したのではないだろうか。ちなみに、御縁起にみえる芦屋の津（現在の福岡県遠賀郡芦屋町）には、神功皇后が射通されたと伝える島（洞山）があり、京都郡にも、百合若大臣が射通したという島（羽島）や、鏑矢があつたという島（鏑島）がある。あるいはさききのべた海人部の伝承とおぼしき弓の話と何か関係があるのではないかと思われる。

ついでながら四国の河野氏の家乗「予章記」<sup>註20</sup>にも、強弓を射て、日本に攻め入つた敵将をたおす話がみえる。この敵将は全身刃物がたたず、ただ足の裏の一眼だけが弱点である。河野益躬がこれを射通して退治したという話は、ユリシイズのサイクロペを退治する物語と似ている。井沢長秀は「広益俗説弁」の中で、この益躬を百合若のモデルと考えた。その当否は別として、河野氏は瀬戸内海から豊後水道にかけて雄飛した海の民の一族であり、百合若説話とも無関係ではないように思われる。ことにいまも宇佐の近くに河野姓を名のる人が多いのは、河野氏と宇佐との関係を知る一つの資料である。

## 七 本縁譚としての百合若説話

最後に舞の本にみえる高尾の神護寺、および彦岐の「百合若説

「経」における本縁譚についてふれたいと思う。

舞の本によれば、高尾の神護寺は、百合若のために死んだ愛鷹緑丸のために建立したものであると述べている。百合若の愛鷹緑丸が各地の社寺の縁起として語られていることは枚挙にいとまがない。その中には、豊後海部郡の鷹尾山神宮寺や、筑前玄界島の小鷹大明神も含まれている。前者は百合若が緑丸のためにたてた寺といい、後者は緑丸を祀つたものと伝えてある。これらの縁起がどのような性格をもつか、まだ調査が行きとどかないが、いま高尾の神護寺について考えてみよう。

何故舞の本は神護寺をさして百合若の建立と述べたのであろうか。さきの豊後の神宮寺の伝説を、そのまま名称が似た京都の寺に結びつけたにすぎないのだろうか。いうまでもなく神護寺は、入幡宮の神託によつて建立されたといわれ、鷹の尾の形に似たゆえに名づけられた高尾山は、入幡大菩薩垂跡の地という信仰があつた。すなわちこの寺は、入幡の化身である鷹にゆかりの地として、入幡の託宣をうけて造立され、のち真言宗の寺となつたと伝えられている。したがつて、舞の本でこの寺を緑丸のために建てた百合若ゆかりの寺とするのも、入幡宮との関係を考えれば、納得がゆくのである。

壱岐の「百合若説経」第一類<sup>註22</sup>は、豊後の柞原（ゆすはら）入幡、肥前の淀姫神社、壱岐の手長男神社、玄界島の小鷹大明神の本縁譚である。百合若大臣は柞原入幡に、妻の輝日の前は淀姫神社に、百合若を鳥でたすけた茨木童子という小鬼は手長男神社に、みどり丸は小鷹大明神にと、それぞれ現われたというのである。後の二者は

しばらくおくとして、柞原入幡と淀姫神社が入幡信仰と関係が深いことは注意すべきである。

続群書類従に収録された「由原入幡縁起」<sup>註23</sup>はまづたく百合若とは無関係なものであり、このような百合若にからまる本縁譚が、いづごろ、どうして生れたのか判然としないが、壱岐の説経が、詞章こそ近世のものながら、入幡縁起としての性格をもっていることは興味深い。同様に、輝日の前が淀姫神社と現じたということも入幡との関係を知る上に大切である。淀姫神社は神功皇后の伝説にみえる、その妹、豊姫（また玉依姫、淀姫ともいう）をまつつたものである。また宇佐の比売神として祀られている豊姫は、入幡信仰によれば入幡神の妻という性格をもつており、大帯姫（神功皇后）、入幡神（菅田天皇）、比売神（豊姫）三者の関係は、かの海宮遊幸神話における玉依姫、ウガヤフキアヘズノ尊、豊玉姫の関係と同一である。しかも、海中に如意宝珠を求める満干二珠の物語も共通しており、海人部系の同一の物語がそれぞれに変形したもののようにある。また、女性神がいずれも巫女としての性格をもっていることも看過してはならない。こうした性格の淀姫神社と現じた、と語られる輝日の前も、小栗判官説話における照手姫などと同様に、ある時期において百合若の物語の伝承者となつた巫女的な女性ではないかと思われ、宗教的な面から百合若説話をさぐる一つの手がかりとなつていのである。

折口信夫博士は、百合若説話は悪霊退散の宗教的意味をもつていたと述べておられる。<sup>註24</sup> たしかに壱岐の説経や百合若伝説にはそうした色彩がつよい。右にのべた輝日という女性があらわれるのは、そ

うした宗教的なものとなつてからであろう。しかしその背後には海人部——八幡信仰——異国降伏という一連のつながりが感じられるのである。

### おわりに

以上、数項目にわたり、百合若説話と、宇佐を中心とした八幡信仰との関連について考えてみた。そしてその中に、北九州の海人部との密接な関係を知り得た。しかし、これだけでは、百合若説話のすべてを論ずることはもちろん不可能である。むしろいよいよ問題が広がってゆくことを意識するのである。

百合若説話の中には単なる比較文学の方法だけでは解決できない多くの問題が含まれている。仏典の善友太子の物語といい、ユリシイズといい、海の文学としての大きな視野に立たなければ、百合若説話との関係を簡単にきめることは不可能である。ただおぼろげにわかるのは、海の民の物語として海人部などに伝承されてきた英雄海洋流浪譚ともよぶべきものに、宇佐を中心とする八幡信仰や伝説がからまり、やがて巫女の手にわたつて宗教的なものとして唱導されてきたらしい跡がみられることである。舞の本の「百合若」も、そうしたものが文芸化されたとみるべきであろう。

百合若説話と八幡信仰との関連から、以上の点を問題として提起したい。天台宗と結んだ<sup>註25</sup>彦岐の「百合若説経」については、他日稿を改めたいと思う。(一九五九・一〇・一五)

註(1) 「文学・語学」第十二号所収。

(2) 金関丈夫博士「木馬と石牛」(大雅新書)所収の「百合若

(22) (21) (20) (19) (18) (17) (16) (15) (14) (13) (12) (11) (10) (9) (8) (7) (6) (5) (4) (3)

大臣物語」「神武の子ら」参照。

山口麻太郎氏校訂「百合若説経」(一誠社刊)。

坪内逍遙博士「百合若伝説の本源」(「逍遙選集」第十卷所収)参照。

中山太郎氏「百合若伝説異考」(「民俗学論考」所収)参照。

「言継卿記」天文二十年正月五日の条に曲舞「ゆりわか」の名称がみえる。

「看聞御記」「満濟准后日記」の応永二十六年の条参照。九州文化史研究所所蔵の写本による。なお原本の万葉仮名の部分は便宜上片仮名に改めた。

称徳天皇三年神護景雲元年丁未十一月廿四日託宣。同天皇五年神護景雲三年己酉七月廿一日和氣清麻呂為高野天皇勅使参宇佐宮之時託宣。

註(2)参照。

右に同じ。

註(4)参照。

拙稿「幸若舞曲「百合若大臣」と報恩経」(前出)参照。Cowell & Rouse tr.: Jataka, Vol. III, p. 89

「淵鑑類函」卷四百二十二 鳥部「鶻」による。水沢謙一氏編「越後の民話」(未来社刊)所収の「百合若大臣」参照。

「彦山流記」「彦山縁起」参照。

「太宰管内志」豊後之部 大分郡万寿寺の条参照。群書類従 合戦部 所収。

「年中行事大成」参照。

彦岐の「百合若説経」には三種あるが、そのうち、十段または十一段に構成され、各段の末尾に祈禱の文句を附した第一類だけに、この本縁譚がみえている。最近まで梓巫イチジョーによつて口唱されていたものとは、やや異つてい



るが、以前は、祈禱に使用されたものとみられ、伝本も数本ある。

(23) 続群書類従卷第七十七所収。

(24) 折口信夫博士「日本芸能史ノート」(中央公論社刊)二〇四頁参照。

(25) 老岐の「百合若説経」は、天台ヤボサを祀る巫女によつて唱えられていた。

**追記** 本稿のために数々の御教示をたまわつた金関丈夫博士、資料調査に便宜をあたえられた九大印度哲学研究室および九州文化史研究所に対して、心から御礼申し上げます。また本稿校正の途中、西田長男博士から、百合若の「若」は八幡宮の「若宮」と関係があるのではないかとの御示唆をたまわつた。この問題については、あらためて考察したい。

— 本学助手 —